パッシブ環境調整工学（第８回目）［水曜日・18:00〜19:30・居住環境学専攻会議室］

2021.06.09

環境共生学研究科・空間システム学分野
辻原万規彦

「建築環境工学」から「建築環境学」へ
-建築環境工学の新しい研究手法を考えられないか-

１.「建築環境工学」から「建築環境学」へ

（１）現在の建築環境工学分野への疑問

・モデルは正しいか？（単純化と現実の複雑な世界→単純化して理解する）

・「代替案の提示/何％かの削減」に焦点を充てた話では，「人」が見えないのではないか？

・「人」は単なる被験者か？統計処理で良いのか？

・コントロールボリューム（オイラー型）のみで良いのか？

　→知らぬ間に，固定された枠組みを使っていないか？

・既存のモデルの改良や方法の組み合わせで良いのか？

注）

・オイラー的な考え方：止まって観測→デジタル化しやすい

・ラグランジェ的な考え方：一緒に移動して観測→デジタル化しにくい

（２）新しい枠組みが作れないか（→実際には，現在休止中）

・「人」（の気持ち）が見える研究？　→前回の内容（小規模地熱エネルギーの利用），下記の［1］

・異なる指標を使えないか？　→下記の［2］や［3］

　⇒何らかの指標を比べて評価する←新しい指標を作れないか/作ってみたい

・モデルが検証できないか？装置そのものを新しく提案できないか？

　→現在は取り組んでおらず（かつては，取り組みあり）

・あっと思う組み合わせができないか？

・記録を作る大切さ

⇒実験でもなく，測定でもない新しい手法＋建築設備史の可能性

（３）生活の中の建築環境学

・建築環境学（建築環境工学）は実際の生活に密着した分野

・生活する人々が見える/見たい，という意味で「人」に着目

２．関連する文献

以下の文献を参照。ほとんどが，辻原作成のホームページ（辻原と研究室の業績リスト）（https://www.pu-kumamoto.ac.jp/~m-tsuji/gyouyear.html）にリンクあり。もしくは，ダウンロード可能。

［1］中山満美，辻原万規彦，細井昭憲，安浪夕佳：地方都市における一般公衆浴場の変容に関する研究，日本建築学会技術報告集，第 26 号，pp.679～684，2007.12.

［2］仲美帆子，辻原万規彦：局地風が集落に及ぼす影響と集落に住む人々の防風の工夫に関する研究，日本建築学会九州支部研究報告，第 50 号・２〔環境系〕，pp.197～200，2011.3.

［3］原田紫帆，辻原万規彦：阿蘇外輪山の内側に位置する神社の配置と人々の暮らしの関係，日本建築学会九州支部研究報告，第 51 号・３〔計画系〕，pp.421～424，2012.3.